兵庫県地域遺産活用指針～地域の宝を五国で活かす～（概要版）

令和元年(2019 年) 5 月　策定
兵庫県地域創生局地域資源課

Ⅰ　指針の位置づけと目的

ふるさと意識の希薄化
止まらない人口流出
少子高齢化の進展
＝ コミュニティの危機

解決策のひとつ

地域アイデンティティの確立

地域遺産の活用

・過去からの自然や人の営みの所産が、文化・自然等様々な分野において有形・無形の様々な形態で今に継承されているもの
・地域遺産は“オンリーワン”

【指針策定の目的】
・魅力あるコミュニティの維持に向け、地域主体で取り組まれている地域遺産を活用した地域づくり活動のさらなる促進。
・地域遺産の活用の仕方や地域づくりに繋げる方法が分からない人、取組みに行き詰まっている人のサポートとなる内容。

Ⅱ　ひょうごの地域遺産の特色、可能性

・素材となる遺産、登場人物の宝庫（旧五国からなる多様な歴史・文化・産業）
・心に残る風景の宝庫（ため池、里山、棚田、渦潮等の地形）
・学びの題材の宝庫（畿内に近く歴史上のドラマや有名な事件が起っている）

・隠れているものに気づかなければ素材にもならない
・「たくさんある」だけでは「素材」のまま
・多くの人の心に届かせる工夫が必要

①「発見」の重要性
あたりまえにある風景の価値に気付く
②「ストーリー化」の有効性
事実・史実を分かりやすく、地域内外に発信する

【多彩なストーリーを生み出す素材群】※本文中はマトリックスで記載

1　ふるさとへの思い、祈り、風情	2　歴史をとどめる町並み、名建築	3　豊かさをもたらした技術・産業	4　受け継がれてきた神話	5　地球の営み、自然の奇跡	6　人と自然の共生
ﾃﾞｶﾝｼｮ節（丹波）、岩座神の棚田（播磨）、農村歌舞伎、麒麟獅子舞（但馬）など	宿場町・平福（播磨）、阪神間ﾓﾀﾞﾆｽﾞﾑ（阪神）、篠山の城下町（丹波）、名城・国宝寺社など	多田銀銅山（阪神）、たたら製鉄（播磨）、塩の国（播磨）、北前船寄港地など	石の宝殿（播磨）、五百羅漢（播磨）、松帆銅鐸（淡路）など	鳴門海峡の渦潮（淡路）、玄武洞（但馬）、篠山層群（丹波）など	北摂里山（摂津）、ため池群（播磨）、コウノトリ（但馬）など

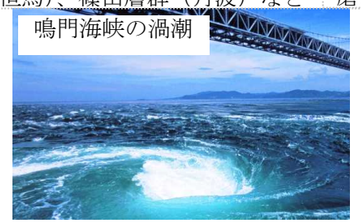
デカンショ節

岩座神の棚田

平福の町並

多田銀銅山

石の宝殿


鳴門海峡の渦潮

玄武洞

Ⅲ　取組みの課題と方向性

＜意識＞	＜情報＞	＜人材＞	＜発信＞	＜なりわい＞	＜まちづくり＞
自分の町には何もない	情報が分断されて分からない	担い手・専門家が町にいない	魅力を発信するノウハウがない	遺産で儲けるという発想がない	どんな町にしたいか分からない
↓	↓	↓	↓	↓	↓
いつもの風景を見直す	リスト化で他との共通点を発見	地域外の助っ人に目を向ける	オンリーワンに着目する	活用は保存につながる	議論の場をつくり、共有する

Ⅳ　重視する視点

1　地域遺産を地域づくりの資源の中核として活用する
地域遺産は人間の暮らしの様々なシーンに密接に関わっており、観光だけでなく教育、まちづくり、経済活動など様々な観点から見直すことが、新しい価値創造につながる。

2　活用と継承に向けて地域遺産の発見と価値の共有を進める
存在と価値を知られなければ地域遺産は放置されてしまう。次代に引き継ぐためには、本来の価値を知り、それにふさわしい現代における活かし方を見いだす必要がある。

3　様々な主体の連携で地域遺産のストーリー化に取り組む
地域遺産の背後にあるストーリーを知り、また複数の地域遺産のストーリー化を行うことで、地域遺産と人々の関わりが理解しやすくなり、認識されにくい小さな遺産の再発見につながる。

4　ターゲットに応じたパッケージ化で宝の価値を戦略的に発信する
地域遺産の発信には、対象に応じたマーケティングと、ストーリーを追体験しながら、商品やサービスを消費できるパッケージとしてのプロモーションが重要である。

5　文化と自然のつながりでストーリーと体験の魅力を高める
自然と文化の垣根を越え共通項を探せば、地域遺産が広域でつながるストーリーと他にない体験ができる。また、地域遺産やそれを活用する専門人材の情報は広域で蓄積すべきである。

6　地域に住まう人自身が中心となって資源をマネジメントする
目標設定や計画づくり、中核組織の運営など、地域遺産を資源としてマネージメントする中心にあるのは、地域遺産の存在に誇りを持つ地域の人自身である。

Ⅴ　地域遺産を活かす地域づくりに向けて

発見する

①住んでいる地域を生活の視点から見直す
- 昔話や伝説など地域に伝わる謎や、古地図や写真、生活用具等暮らしの中の情報から発見
- 印象的な風景などの写真や「音」から発見

②見出した素材の歴史的意義を知る
- 自治体史や地域史、データベース・アーカイブから探す、専門家のサポートを受ける
- カタログ化を進め、キーワード（人物、事件等）やカテゴリ（芸術、食等）で整理する

③対象地域を広げて幅広く掘り起こす

事例　「オンパク」手法（大分県別府市、福岡県久留米市など）
- 「今も残る江戸～明治時代の『痕跡』を探す」等のｷｰﾜｰﾄﾞとともに、普段から慣れ親しんだ地域資源を紹介する小規模体験交流ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑを市民が企画。
- 交流人口の拡大だけでなく、実施主体の地域住民にとってもそれまで見えなかった地域資源の再発見にも繋がる。
- 別府温泉で始まったこの手法を取り入れた取組みが日本各地に広がり、サミットも行われている。

地元の方が案内する街歩き（久留米市）▲

ストーリーを描く

地域に残る様々な情報を整理すれば、バラバラに見える素材もストーリーとして再構成できる

①複数の遺産の歴史や背景を明らかにし、全体的なテーマを浮かび上がらせる

②同じテーマ、同じ時間軸で繋がる地域遺産のストーリーを作成する

③小ストーリーを再構成して、複線化し、厚みのある全体ストーリーを構築する

（住民、遺産所有者、大学・社会教育施設、地域団体、自治体等の連携が必要）

事例　複線的で厚みのある「国生みの島・淡路」のストーリー

全体テーマ：『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」～古代国家を支えた海人の営み～

サブテーマ：金属器時代・先端文化をもたらした海の民・・・（松帆銅鐸、五斗長垣内遺跡　等）
塩と航海技術で王権を支えた海人・・・・・・・（引野遺跡、貴船神社遺跡　コヤダニ古墳　等）
都を支えた「御食国」・・・・・・・・・・・・・（御井の清水、明石海峡と松帆の浦　等）

⇧ 特色付け

価値を磨く

①　地域の宝としての遺産の価値を顕在化させる
- 「学術的な希少性」「題材の面白さ」「インパクト」等伝わりやすい特色を明確にする
- 特色を活かした地域の魅力づくりの方向性を議論する

②他地域との差別化を図る
- 全国にも発信できうるポイントを見出し、人の心を捉え続ける発展性を追求する

③遺産の価値と目的を共有する
- 世界遺産、世界ジオパークなどの外部からの認定を目指すことも一手法

事例　“世界遺産”ではなく“世界ジオパーク※”を目指した「山陰海岸」（※世界遺産と同じﾕﾈｽｺ正式事業に格上げ）

国立公園指定 ▶ 世界遺産を目指す議論 ▶

- 山陰海岸の本質的な価値は？→海岸景観美だけが価値ではない
  →日本海の形成過程を示す地形・地質と、人々の生活との密接な関わり

地域内で価値を共有し、磨く

- 地域の将来像を議論（活力が低下する地域で新たな産業を起こしたい）
  →そのために必要なのは、“守る”だけで無く“活かす”ための価値付け

▶ 世界ジオパークを目指す地域の熱意へ

宝を発信する

①素材を活かすデザインとパッケージ化を行う
- 事業者の知恵も生かし、地域遺産を生かしたもてなしの方法を考える
- 地域の歴史文化の特徴としてのテーマ（時代、人物、食、絶景など）を見出す
- テーマを中核にしつつ、アクティビティや観光メニューなどを分野横断で組み合わせる

②商品化とプロモーションに取組む
- 視覚（映像、画像）で惹きつけ、プログラムメニューとして打ち出す
- 着地型旅行の提供を行うためのプラットフォーム組織の構築をめざす
- インバウンドにはネイティブ自身の言葉での発信が重要

テーマ型まちづくり事例

■「宿場町」（篠山市福住地区）
- かやぶき屋根の町家と農村風景が交互に続く宿場町として重伝建地区。町並み散策、城下町観光、ぼたん鍋の食、陶芸体験などの工芸、古民家宿泊、お試し移住など、滞在型ﾂｰﾘｽﾞﾑや移住促進に取り組む。

■「陰陽師の里　江川」（佐用町）
- 安倍晴明と芦屋道満の両方の塚があり陰陽道に則って形づくられた地域。地域づくり協議会が中心となり、写真展やｺｽﾌﾟﾚｲﾍﾞﾝﾄ七夕行列、星空の美しさを活かしたｲﾍﾞﾝﾄの開催により「陰陽師の里」としてのﾌﾞﾗﾝﾄﾞ化を目指す

■「北斎」（長野県小布施町）
- S40 年代は人口 1 万人、観光地として無名。「北斎館」の建設をきっかけに町全体で修景。
- ㈱ｱ･ﾗ･小布施を設立、ｶﾞｲﾄﾞｾﾝﾀｰ、ｲﾍﾞﾝﾄ、飲食、宿泊、賃貸業を運営。栗、花をﾃｰﾏに付加、年間 110 万人の観光客を実現

五国（広域）で活かす

①県域でのドラマを描く
- ターゲットに応じた広域的なテーマ設定（全国最多の日本遺産認定地相互の連携）
- 兵庫に来なければ完結しないドラマ、兵庫ならではのドラマを見出す（神話、近代化、

②大きな舞台を面として生かす
- アクセス手段の検討（瀬戸内・山陰地方での連携、移動自体に観光価値を付加する仕組み）

③情報と人材を広域で環流させる
- 兵庫地域遺産ＧＩＳデータベスの構築、専門人材を広域で生かす仕組み

参考：広域で活かす県の取組み

（広域課題への具体的対策）

総合力発揮に向けた日本遺産等横軸連携
＊アクティビティの共有などの連携
＊“兵庫の日本遺産”のブランド力向上
＊交通アクセス、ルートの検討と改善

（五国の遺産の価値と美しさを伝える）

＊五国の遺産映像の制作、アーカイブ作り
＊兵庫津ミュージアム（仮称）の整備

（行政界をまたいだ情報集約・マップ化）

兵庫地域遺産ＧＩＳデータベース
＊地域遺産をカテゴリごとにマッピング
＊人物や事件などキーワードで関連付け
＊アクセス時間や想定観光客ニーズ分析

次代に繋ぐ

①地域共有の資産を外部との連携で生かす
- 地域遺産を地域共有の宝として保存活用する仕組み作り

②住民の誇り（シビックプライド）へ繋げる
- ふるさとへの誇りと、自分が町をつくっているという自負心をこどもから大人まで育む工夫

③様々なリスクから地域遺産を守る
- 大規模災害や、コミュニティの変容に備えて地域遺産継承の備えをする

事例　大学との連携による親子参加型イベント「ミキシル」（三木市）
- 三木市と神戸芸術工科大学との連携協定の一環として、三木市に残る地域遺産や観光スポットを巡る「三木国ﾊﾟｽﾎﾟｰﾄｽﾀﾝﾌﾟﾗﾘｰ」「ﾐｷｼﾙ CM」など、子ども達が体験しながら故郷を知るための親子参加型イベントを開催、
- 新興住宅地の住民は古くからの市街地を訪れたことも無い人も多く、交流のきっかけとなっている。

▲ミキシルＣＭの様子